

チャンス・チャレンジ・チェンジ

秋田県立養護学校天王みどり学園 加賀谷 勝



授業で「考える力」を育てるポイント



生活単元学習では、生きる力を身に付けることが目標である。生きる力とは、生活上の課題に直面したとき、過去の知識や経験を基に、自分の役割を果たすことである。換言すれば、課題解決のために子どもが主体的に考えて行動することである。

授業で子どもの「考える力」を育てる「4つのポイント」を紹介する。

1 指示から質問したり、ヒントや選択肢を与えたりする

- ・子どもが「はさみはどこにあるんですか？」に対して、すぐ答えを教えるのではなく、「どこにあるかな？ 前の時間どこから持ってきた？」と質問をする。あるいは、ヒントや選択肢を与える。そして、子どもが見付けたときに、自分で考えて、選んで行動できたことを評価する。これが達成感を味わう機会となり、次からは教師に質問する前に、自分で考えて行動できるようになっていく。

2 最後は必ず成功体験で終わりにしてほめる

- ・プラスの体験（成功体験）からプラスを学べるが、マイナスの体験（失敗体験）からプラスを学ぶことは難しい。小さな成功体験を重ねて、自分であることへの自信（自己肯定感）と、自分はこのことができるという自信（自己有能感）をたせる。失敗しても適切な行動を教えて、「～できたね」とほめる、「～すると～できるんだ」と、どのようにやればうまくいくか、具体的に伝えてよいイメージで終わることで、主体的に考えて行動することが定着する。

3 子ども自身に目標をしっかり意識させる

- ・「ジャガイモの皮を残さないでむく」が目標ならば、子どもがそれを確認する。そして、実際の活動場面で皮の残しがないか子ども自身が評価（自己評価）する。もし皮の残しがあれば、自分の評価を確認してもらうために先生に持って行き、評価を受ける。先生に報告するときは、「できました」ではなく、「ジャガイモの皮を残さずにむきました」と言う。それが注意力や考える力を伴う意識となっていく。

4 考えたことを発表し合う場をつくる（学びの共有化）

- ・子どもはペアやグループで、自分の考えを伝え合ったり、教え合ったりする「学び合い」を通して力を高める。周囲の友達の考えを基に、自分の考えを発展させたり、自分の意見を言葉にすることで理解を深める。そして、みんなで学びを共有することで達成感がより大きくなる。

この4つのポイントを授業だけでなく、いろいろな場面で繰り返すことで「自分で考えて行動する、相手の気持ちを考える」ということが習慣付けられる。教師は必要のない支援をしていないか、支援を減らす工夫をしているか、一人で、仲間と協力して「できる状況づくり」を設定しているか、という観点から授業づくりを見直し、子どもが自ら進んでやれるような環境をつくる。



「バスケットボールの審判と授業づくり」

・バスケットボールでは、先にプレイを先回りして待ち受けているリード審判とプレイの集団の後ろから追いかけて行くトレイル審判の二人がいる。ハーフコートを6分割し、攻撃と防御が入れ替わる度に、審判の役割も入れ替わる。「ボールのないところ」のプレイが勝敗を決めることもあるため、審判は試合前にお互いの役割と責任範囲を確認する。そして、多くの時間をかけるのは、両チームの特徴を細かく分析して試合のプランを立てることである。このプランがあれば、審判の的確なホイッスルでプレイが進み、選手はもてる力を発揮できる。これは授業づくりと似ている。子どもの実態把握を行い、指導案を作成して子どもの目標や教師の役割を確認する。授業では、目の前の子どものわずかな表情や言動の変化を感じ取り、軌道修正を加えながら進めていくことで、子どもの力を引き出すことができる。